

RESIDENTIAL ARCHITECTURE

PRIZE

住宅建築賞2021入賞作品集



住宅建築賞2021

主催 一般社団法人 東京建築士会

企画 東京建築士会 事業委員会

後援予定 公益社団法人 日本建築士会連合会
一般社団法人 東京都建築士事務所協会

一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部

株式会社 新建築社
株式会社 エクスナレッジ

協賛 株式会社 建築資料研究社 日建学院
株式会社 総合資格

協力 リビングデザインセンターOZONE
工学院大学 木下庸子研究室

お問合せ先

一般社団法人 東京建築士会
中央区日本橋富沢町11-1富沢町111ビル5階
tel.03-3527-3100 fax.03-3527-3101
[E-mail] jks@tokyokenchikushikai.or.jp
www.tokyokenchikushikai.or.jp

住宅建築賞 入賞者

住宅建築賞 金賞
渡邊 大志

住宅建築賞
青木 弘司 + 岡澤 創太 + 角川 雄太 + 高橋 優太
井原 正揮 + 井原 佳代
三井 嶺
大石 雅之

住宅建築賞 入賞作品

2021年 | 一般社団法人 東京建築士会

応募主旨

審査員長 平田 晃久

【共生系としての住宅】

私たちの身体の表面には様々な微生物の織りなす生態系があり、身体にとって不可欠な役割を果たしています。人間の身体そのものが一つの共生系なのです。微生物的自然は目に見えません。しかし確実に私たちの周りの空気を変え、行動や思考の根底をかたちづくっています。COVID-19の引き起こした事態は、よくも悪くもこの目に見えない自然とのつながりを顕在化させました。これに対する反応はおそらく次の二つに分かれます。ひとつは徹底した除菌やクリーンさ、あらゆるレベルでの異物の混入を防ぐ管理体制に向かう反応です。これらは緊急事態や医療機関において、たしかに必要です。しかし私たちの生活の全てにこれらが過剰に行き渡った未来はディストピアでしかないでしょう。もうひとつの反応は、私たちの存在そのものが、多様な生物の織りなす共生系であることを認め、目に見えないものも含めたさまざまな生の気配に耳を傾けることです。他者を遮断し純粹な空間や建築をつくるのではなく、移り変わる環境の中で、時に適切な距離を発生させながら、異なるものが共存する場をつくること。このことがかつてなくなりアルな挑戦である時代に、私たちはいます。住宅は希望です。なぜなら、住まい手の感覚とつくり手の工夫によってこのふたつの対立を乗り越え、他の建築に先駆けた可能性を示せるからです。さまざまな共生系としての住宅の試みは、この度のパンデミック以前からありました。そして改めていま、共生系としての住宅の価値を問うような建築を評価し、未来に向けた議論のきっかけにしていきたいと思います。挑戦的な作品を期待しています。

応募要項

- (1) 上記の主旨にかなうもの
- (2) 一戸建住宅、集合住宅及び併用住宅等とする(大幅な増改築、公共の建築も含む)
- (3) 原則として作品は最近3年以内に竣工したもの
- (4) 雑誌等に発表したものでもよい
- (5) 建築物の所在地は原則として1都3県(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)とする
- (6) 応募の点数は自由とする
- (7) 審査員の関与した作品は応募できない
- (8) 応募者は予め建築主(所有者)・施工者の了解を得て応募すること

応募要件

賞の対象 設計者・建築主・施工者の3者を顕彰するものとする。

応募資格 応募作品を設計した建築士資格を有し、建築士会正会員である者

登録料 本会正会員:無料(申込時に入会した方を含む)

他道府県、建築士会 正会員:1点につき5,000円(作品を郵送する場合、登録料は現金書留にてお送りください)

提出資料 申込書及び本会指定A2版台紙
※書類審査を通過した場合、建築士免許コピー及び検査済証のコピー(確認申請不要物件は、不要理由を明記した文章)の提出を求めることがある
図面及び完成写真数点(内・外観)、平面図、立面図、断面図、配置図、設計主旨(300字以内)等をA2版台紙一面(本会指定の用紙・原則として縦づかい、パネル化しない)におさめること。なお、写真の大きさ図面等の縮尺及びレイアウトは自由とする。プレゼンテーションの表現自体は、審査の対象としない。

提出資料取得方法 申込書及び本会指定A2版台紙は本会事務局において頒布します。郵送希望の場合は、宅配便着払いにてお送りできます。
専用申込フォーム(右記QRコード)またはE-mailにてご請求ください。E-mailの場合、①件名を住宅建築賞申込希望、②氏名、③送付先、④連絡先、⑤所属建築士会名と会員番号等を明記のうえ、送信ください。なお、事務処理の迅速化を図るために、宅配便着払い了承の旨お書き添えください。(E-mail:jks@tokyokenchikushikai.or.jp)

提出先 一般社団法人東京建築士会 住宅建築賞係
〒103-0006 中央区日本橋富沢町11-1富沢町111ビル5階 TEL 03-3527-3100

提出期限 2021年2月10日(水) 窓口へ直接お持込みの場合は、2月10日(水)17:00迄とする。郵送の場合は、2月10日の消印有効。

審査員

審査員長 平田 晃久

審査員 加藤 耕一／曾我部 昌史／山田 紗子／吉村 靖孝

審査

| 1 | 書類審査に通過したものは原則として現地審査する。※現地審査の実施方法については現在検討中である。

| 2 | 入賞発表 2021年4月中旬

- ・審査結果については、応募者に直接通知する
- ・応募者は審査結果について異議を申し立てることができない

表彰及び賞金	応募図面の取扱い	
1	入賞者(5点以内)に対し賞状(盾)及び賞金を贈り、入賞者の中から特に優れたものには金賞を贈る。 住宅建築賞 70,000円 住宅建築賞金賞 150,000円	
2	建築主、施工者には入賞を記念する盾を贈呈する。	
3	表彰式:本会定時総会の席上(6月上旬開催予定)	
4	応募作品は返却しない。	

審査結果(2021年 住宅建築賞)

応募点数 60点 住宅建築賞 入賞5点(内金賞1点)

住宅建築賞 (受付順)	住宅建築賞 金賞	節会(東京都)	■設計者:渡邊大志(早稲田大学) ■建築主:匿名希望 ■施工者:株式会社高木鐵工(建物構造:S造一部RC造)
	相模原の家(神奈川県)	■設計者:青木弘司+岡澤創太+角川雄太+高橋優太(合同会社AOAA一級建築士事務所) ■建築主:ハスバ特尔、馬迎新 ■施工者:株式会社栄伸建設(建物構造:木造)	
	はつせ三田(東京都)	■設計者:井原正揮+井原佳代(株式会社ihrmk) ■建築主:株式会社愛宕長谷川 ■施工者:株式会社辰(建物構造:RC造[耐震壁付ラーメン構造])	
	森の図書館(神奈川県)	■設計者:三井嶺(株式会社三井嶺建築設計事務所) ■建築主:橋本麻里 ■施工者:大同工業株式会社(建物構造:地下RC造、地上木造)	
	品川の家(東京都)	■設計者:大石雅之(大石雅之建築設計事務所) ■建築主:藤澤康博 ■施工者:株式会社キミ建設(建物構造:RC造一部木造)	

参考資料

一次審査結果 2021年2月21日(日)実施。応募作品60点より、1人7点~10点を投票(審査員5名)

【一次投票】

投票した作品番号

審査員	作品番号									
平田	9	10	14	18	27	29	30	36	40	57
加藤	1	2	3	17	26	30	35	39	44	53
曾我部	2	10	14	36	41	44	57	—	—	—
山田	1	2	14	17	23	27	57	—	—	—
吉村	1	2	14	17	19	23	27	29	51	57

一次投票結果 (計23点)

獲得票数	作品番号	合計
4票	2、14、57	3作品
3票	1、17、27	3作品
2票	10、23、29、30、36、44	6作品
1票	3、9、18、19、26、35、39、40、41、51、53	11作品

一次投票23作品より議論し、二次投票を行った。

下記5点を一次審査通過とし、
二次(現地)審査対象とした。
二次(現地)審査は、
3月15日(月)に実施した。

1 27 29 30 57

【二次投票】

投票した作品番号

審査員	作品番号				
平田	2	14	27	30	57
加藤	1	27	29	30	44
曾我部	2	27	44	57	—
山田	1	2	23	27	29
吉村	2	17	23	27	57

二次投票結果(下記10点より、議論) (計10点)

獲得票数	作品番号	合計
5票	27	1作品
4票	2	1作品
3票	57	1作品
2票	1、23、29、30、44	5作品
1票	14、17	2作品



一次審査風景

総評

平田 晃久

2021年新型コロナウイルス感染症を巡る緊急事態宣言の中、万全の注意を払いながら現地での審査が行われた。現地での審査に快くご協力いただいたすべての方々に厚く感謝したい。このような事態の中で、「共生系」としての住宅を考えること自体が一つの挑戦である。もちろん共生を否定したところに生命は宿らない。コロナ後にどれだけ世界が変容するとしても、私たちの生命活動や生活が、様々な共生を前提としたものであること自体は、変わらないだろう。しかし、「共生」とか「異質なものの混ざり合い」といった言葉のニュアンスは、かなり異なったものになっていくのかもしれない。受賞作は、そんなことを問いかけてくるように思えた。異質なものの共生は、すべてが無批判に混じり合ってしまうような場では起こらない。異なるものとの間に断層を、あいまいに消去するのではなく、むしろ顕在化させつつ共存させる建築が求められるのではないか。

「節会(セチエ)」は、応募作の中で最も緊張感のある共存を意識的に実践している建築である。作者は現実的な機能をもった生活の場を「倉庫」、機能に縛られない自由なふるまいが生起する場を「舞台」と呼んで、住宅のなかに鋭い二項対立を持ち込もうとする。一次審査の時点では、もはや古風ともいえるワーディングや硬い形式への指向性に戸惑いを感じないでもなかった。しかし、実際に訪れた空間はむしろ爽やかさを感じるくらいにあっけらかんとしており、何よりも不思議な心地よさに満ちていた。そこには古来より引き継がれてきた九間のスケール感もポジティブに働いているのだろうが、そのような絶妙のスケール感の空白が現実に発生している背後には、通常だと煩雑な生活にかかり消されてしまう「舞台」の位相を獲得しようとする作り手=住まい手の強固な意志がある。とはいえ作者は、この境界線の是非を巡って家族とのストラグルもあるし、いつもこの状態なわけではないとニヤリとする。無限遠にある理想形があるからこそ、通常では起こりえない現実が発生する。もちろん理想形とずれたものであるとしても、だ。そういう、建築的なもの持つ厳格さと大らかさを感じさせる、幸福な緊張感に満ちた原理と現実との出会いがあった。

「相模原の家」は金賞を最後まで争った。作品に関する詳細は個別に書いているのでここでは述べないが、「節会(セチエ)」が



一次審査風景

形式性を導入することで現実との距離を明確に発生させているのに対し、この作品は周囲に広がっている現実の持つ質を建築の中に取り入れようとする。もちろん、周辺と全く同じものをつくろうとしているのではなく、独特的の仕方で現実と交わりつつ同時に距離を発生させており、街並みにもう一つの魅力を共存させている。

「森の図書館」は、歴史を感じさせる本棚や膨大な蔵書を愛するクライアント、建築史に精通した設計者の稀有な出会いがあつてこそ生まれる、気品を持った建築である。海の近くにいながら海が見えなくてよく、半ば薄暗い空間で本に集中したい、という考え方には、隣り合うもの同士の意識にも距離が発生するという読書の経験を思わせる発想があり、無批判なオープンさに流れがちな現代建築に一石を投じるユニークネスがある。そのような考え方方は、共生系という観点からも新鮮に評価できるものであったが、本棚と空間の寸法関係など、空間全体をどのような考え方で統合しているのか、分かりにくい感じもあった。

「はつせ三田」は格子状のラーメンモジュールを通常の半分にすることにより、身体スケールに近い柔らかさを持った住空間を提案している。明確な方法論と共に、確かにつくられた各所のディテールや光や風が通る快適な共有空間のクオリティーは高く評価された。ただコロナ後の世界にも十分に通用するオーソドックスな快適性と完成度を持つ一方で、すでに共有された価値観を変容させるようなコンセプチュアルな主張があり感じられなかったのも事実である。とはいえ、作者が信頼に足る優れた設計者であることは疑いない。

「品川の家」は熟慮された細部が重ねられて生まれた美しいたずまいの建築である。小さくとも互いに関係しあうような連続体をつくることによって、意識の中で大きく感じられるような空間をつくるという、明確な問題意識がある。しかしそれはやや聞きなれた考え方にも見え、生命感をもった様々な雑多な要素が、白く美しい空間に消えてしまわないかどうか、少し気がかりでもあった。とはいえ、賞にふさわしい質の高い建築である。

提出作品が現存せず、審査自体が不可能であった一作品を除き、これからのお宅、これからの建築に対し示唆に富む、優れた作品たちに出会えた貴重な機会だった。

作品講評

2021年住宅建築賞 作品講評

住宅建築賞 金賞 | 節会 | 設計者 渡邊大志 (早稲田大学)

講評者 山田 紗子

今回訪問できた作品の中で、審査員が「一次審査の印象と大きく違う」と口を揃えたのがこの「節会」だった。現地を訪れたのは午後2時過ぎ。「舞台」と呼ばれている南西向きガラス張りの空間に、大きな青空からさんさんと陽光が降り注ぎ、手を額にかざすほどだった。「倉庫」と呼ばれるキッチンや水回りは簡素で閉ざされた空間を想像していたが、実際は無骨ながらも丁寧に造られた家具や建具が設えられ、個性ゆたかな素材が飛び交いながら生活スケールをつくり、がらんとした「舞台」を抱きかかえるように寄り添っていた。「舞台」には何も置きたくない、というのが作者の竣工当初の主張であったが、暮らし始めると家族たちによって物や家具が置かれることもあり、それも許容するようになったとのこと。ただし使い方は固定しない、生活のための空間でもない、「舞台」はどこか住宅ではないような緊張感を持ち続け、同時にこの家の柔らかさをつくっていた。促されるまま固めの床に座り込むと驚くほどに静謐であり、意識が明るい窓の外へと開かれる感覺があった。そして人の動く影をぼうっと見ていると空間の起伏がゆるゆると変わり続けた。はたして住宅に「舞台」は必要なのか。間取りや熱環境的な点で住みにくいだろう、という指摘ももちろんあった。一方で住宅建築が想定された生活の為だけに設計されるべきなのだろうか、という批評性もこの作品に感じた。またここ数十年は建築学外の思考、知性、価値観が持ち込まれることがほとんど無くなっている、その意味においてこの住宅の存在は注目に値するのではないか、という話があった。様々な議論がおこったが、結局実際の空間が素直に良かったという点が評価されたように思う。私は「舞台」に立ったときになにか精神的に鼓舞されるような思いに駆られた。そして本物の舞台のように、その時その時で空間が生まれ変わるような、いきいきとした生の場の可能性を感じている。



住宅建築賞 | 相模原の家

設計者 | 青木弘司+岡澤創太+角川雄太+高橋優太
(合同会社AAOAA一級建築士事務所)

講評者 | 平田 晃久

作者は、従来の「建築家」的な美意識が排除してきた、しかしその実私たちが深いところで親しみを感じる、ありふれた街の風景の構成要素をポジティブに再評価した建築を目指している。無論ここで目指されているのは、決して周りの街と同じものを作ることではない。むしろそういう今までの建築家の視野に入っていたいなかった(あるいは意識下のフィルターで濾過されて、無かったことにされていた)ものの成り立ちを取り込んで、一つの新しい建築として立ち上げようとしている。作者の説明と作品を見る限り、こ

までは大変クリアな問題意識であり、個人的にもとても共感できた。ただ、具体的な方法論のレベルでは、観察する対象やディテールの選択の設定にあやふやな点も見られた。おそらく、作者が目指している建築の本格的実現にはさらなる思考の整理と方法論の探究が必要だと思われるが、今後の行方を興味深くフォローしたくなる、建築愛に溢れた作品であることは間違いない。



住宅建築賞 | はつせ三田

設計者 | 井原正揮+井原佳代(株式会社ihrmk)

講評者 | 曽我部 昌史

一辺1350mmの立体格子をもとに、明快な構成システムで組み立てられた。グリッド内に収められるのは、FIXまたは縦滑り出し窓、壁のいずれか、エントランスは原則EVの両サイド、法的対応で半ば自動的に決められる外形。このシステムを丁寧に運用することで、多様な住戸プラン、変化のある空間の繋がりや視線の流れを生み出した。共用部の位置付けが特徴的である。シェアハウスのような共同性は前提ではなく、マンションのような住戸ごとの孤立感もない。玄関をつなぐ

中央の共用部・めぐり土間とには、バルコニーにあたるインナーテラスや住戸の窓が面し、暮らしの様子が滲み出る。4階の共用テラスは小公園のようでもある。エキスピンドメタルの階段越しにこうした様子がうかがえ、郊外住宅地を歩いているような感覚がある。開発に伴う移転がきっかけの計画で、以前から知り合いの家族も入居しているらしい。そういったことが計画全体や実際の場の使われ方に影響をしているのだろう。



住宅建築賞 | 森の図書館

設計者 | 三井嶺(株式会社三井嶺建築設計事務所)

講評者 | 加藤 耕一

図書館のなかで暮らしたい。本好きならば一度は夢見るファンタジーである。三井嶺さんは、クライアントのその夢を、見事に空間化している。

見どころは「閲覧室」と呼ばれる吹き抜けの空間である。斜面に沿って3層となったテラス状の空間全体が、緩やかにカーブする木の天井に柔らかく包み込まれる。短手方向にもむくりをつけた3次元シェルの屋根には、独特なスリット開口も設けられた。若干、技巧に走りすぎたきらいもなくはないが、柔らかく包み込まれたこの空間は魅力的だ。

「森の図書館」と命名されたこの住宅に入ると、古い図書館を訪れた時のようなノスタルジーを喚起される。それを生み出しているのは、上述の空間構成に加えて、そこに並べられた「古い」書棚の数々だ。九州大学の歴史的什器の保全活用プロジェクトの一環として再利用された書棚が、この空間の主役である。これは単なるインテリアの操作であろうか? 家具(インテリア)からはじまる建築設計という手法は、かつてA.ロースが「被覆の原則について」で論じた手法に通じる。何よりもそうして実現された空間が優れた時間デザインになっているという点で、本作はきわめて興味深い建築作品となっている。



住宅建築賞 | 品川の家

設計者 | 大石雅之(大石雅之建築設計事務所)

講評者 | 吉村 靖孝

階段状にオフセットする白い外殻の中に4枚の床を納めた狭小住宅。この小ささの中では従来の「部屋」という単位が冗長だったのだろう。尋常ならざる高解像度で生活の用、人間のふるまい、外部との関係を観察することによって、部屋は解体され断片化した。いちいち詩的なその断片たちは「都心に家を建てる」というファンタジーが引き寄せがちな豪奢さとは無縁で好感を抱いた。家を建てるという根源的な欲望を等身大に写す鏡のように感じたのだ。一方、小さな殻の中の距離を引き

延ばすため断片同士のつながりを徹底的に排したことは評価の分かれる部分だろう。特に2層目の家事室が上下階を分断していて、これが滞在時間の増えた住宅内で「離れ」のような効果を發揮するのか、あるいは、分けられた両空間が小さすぎて単に閉塞感を煽るのか短時間の滞在では判断できなかった。しかしそれも作者の意図の範疇である。圧倒的な設計力の今後に期待したい。



節会 (Sechie)

舞台と倉庫

この家は舞台と倉庫、庭で構成される。舞台に機能はなく、今日的な住宅機関(木回り・収納・寝室)はすべて倉庫に納められている。

住宅としては無用な舞台をあえて中心に据え、生活行為が舞台と倉庫を往還してされることで、人間の意識の中に立ち現れる空間を目指した。これを日常生活中の「節会」(儀式の意、意識の空間化)と捉え、設計者が与える容器としての住宅ではなく、そこに居る人間の振舞いがそのまま「家」となることを考えた。

舞台に面する立体的な庭は、この性質を強める閉鎖系と、外部の環境へと拡げる開放系の双方の効果を持つ。人間、植物、昆虫、時間などの有形無形の無常な状態と共に居る意識が、節会としてこの家の根幹である。



西側全景(夕景) 舞台が倉庫を後に背負う構成

2階:舞台(無機能スペース) 右に見えるのは屋上に続く鉄板階段

1. 容器ではなく、生活の振る舞いそのものが「家」となる
古来、「家」は冠婚葬祭や端午の節句など、人間の一生涯と直結した様々な儀式の舞台でもありました。親族や友人など繋がりのある人々が時折入れ替わり住み、そこに招かれた客人も適宜加わった日常生活の中で節会(意識化された生活行為)は為されます。それによって住人たちが敷地の中を立体的に動く様子がそのまま「家」として結晶化する姿を目指しました。(1-1.~1-4.)

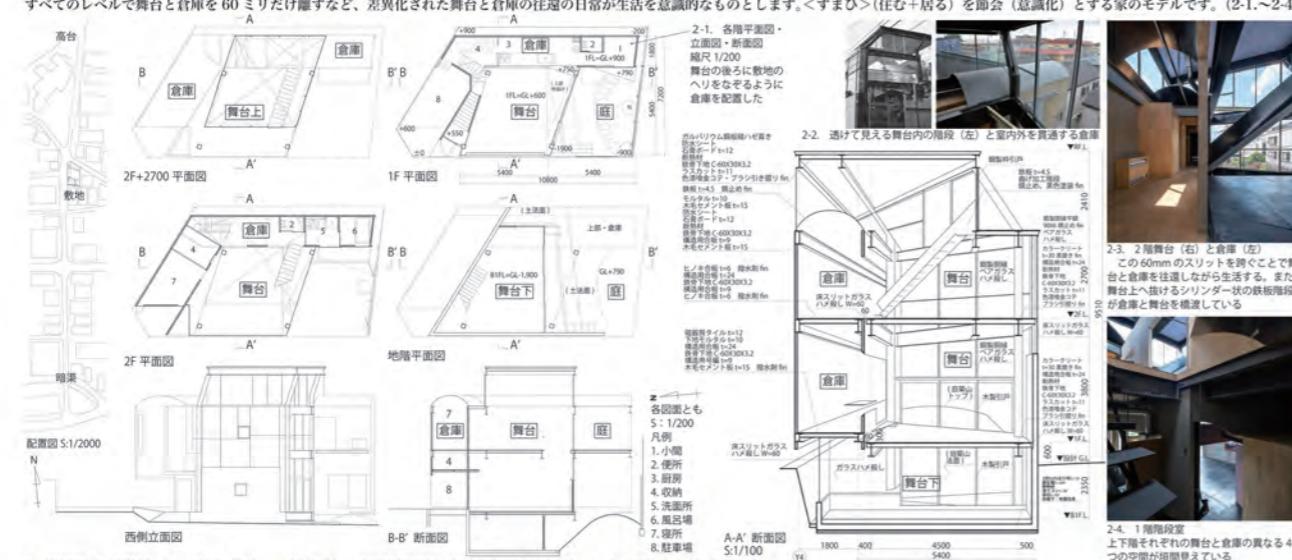


1-1.舞台(左)、倉庫(右)、庭(手前)

1-2.階舞台と舞台と倉庫を横渡す階段が本來の機能とは別に独立したオブジェクトとして周囲の都市住宅街の中に浮かぶ

1-3.2 階段段(左)、1階階段(中央)、庭のステップ(右)
階段と庭の垂直動線がそれぞれのレベルでの舞台と倉庫を構造しつつ、上下階を緩やかにつなぐ。昇降する人間の動きをデザインし、その動きがあることでそこには空間が見えるように心がけた

2.伝統的な日本建築の定型を変形敷地に合わせて立体的に再編し、舞台と倉庫を往還する日常を意識化する
伝統的な日本建築である能舞台の構成(舞台・倉庫(鏡の間)・橋掛り・鏡板など)とモダール(3間)を縦形とし、舞台を規定する4本の鉄骨立て柱が倉庫を空中に背負う構成としました。
定型の伝統建築である能舞台の構成(舞台・倉庫(鏡の間)・橋掛り・鏡板など)とモダール(3間)を縦形とし、舞台を規定する4本の鉄骨立て柱が倉庫を空中に背負う構成としました。
すべてのレベルで舞台と倉庫を60ミリだけ離さなど、差異化された舞台と倉庫の往還の日常が生活を意識的なものとします。
すまひ(住む+居る)を節会(意識化)とする家のモデルです。(2-1.~2-4.)



3.閉鎖系/開放系の庭と色光の変化が、有形無形の無常な状態と共に居る意識をもたらす

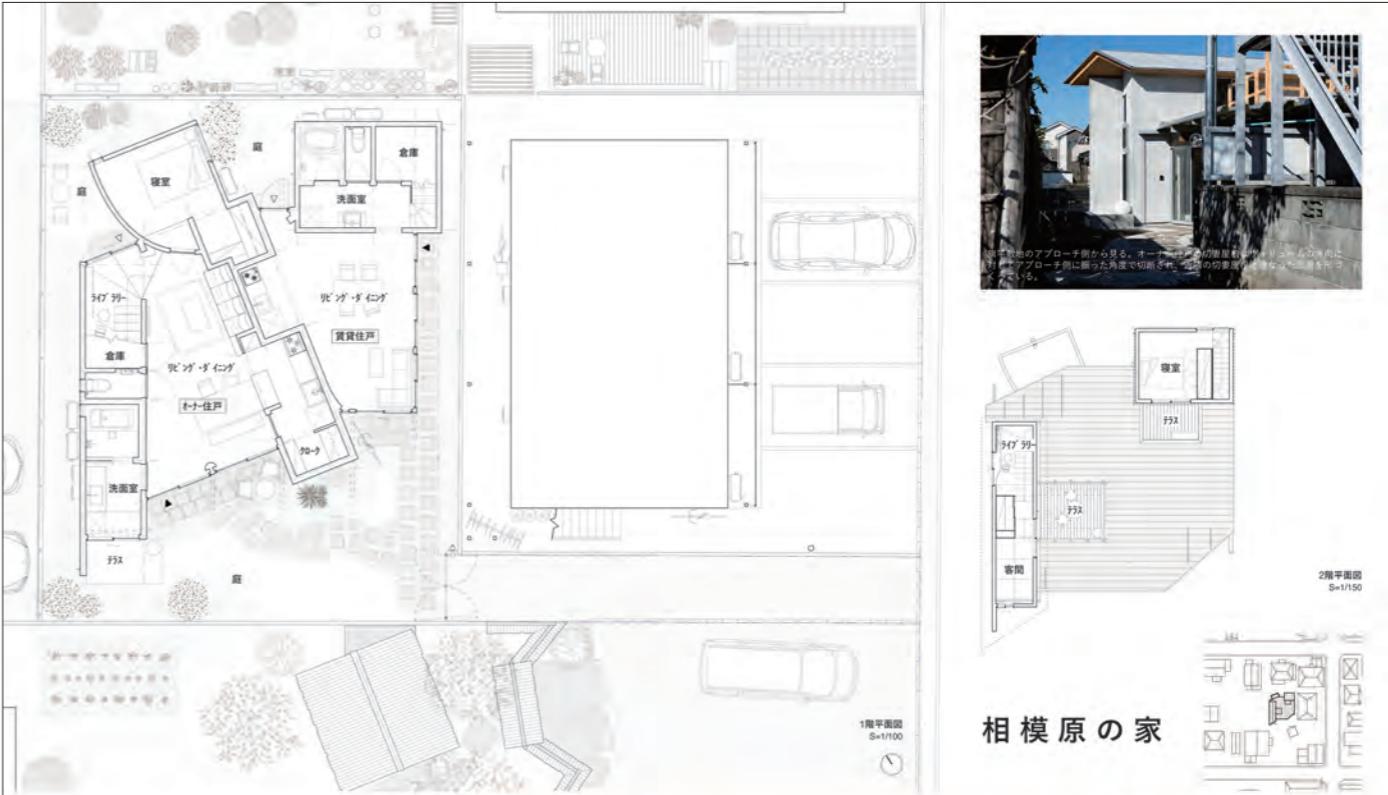
舞台の鏡板とともに立体的な庭は、内なる節会の性質を強める閉鎖系の効果と、周辺環境もその延長として捉える開放系の効果の双方を持っています。(3-1.、3-2.)

また、全体としてモードーンの建築の中で、舞台の一部の壁と天井にのみに色遮蔽で同系色のグラデーションが噴されていました。舞台下(地下)から舞台上(最上階)まで舞台全体のヴォリュームを通じて変化する色光の体验が、時間の存在を感じさせます。(3-3.)

人間だけでなく植物、昆虫や時間の変化も含めた有形無形の無常な状態と共に居る意識が、この家の要です。



*以外の写真は撮影:関拓弥



世界のフレーミング

眼前に広がる事物や現象の総体としての世界を対象化し、場所性を再定義する建築

敷地は旗竿地でありながら、その面積は比較的大きく、隣家の庭などの空地にも面していて、適度に開かれていた。周囲から守られつつも開放的な場所の特性を維持しながら、夫婦ふたりの住戸と賃貸住戸を備えた住戸を計画した。まず、敷地の中央に住戸の界壁を成すヴォリュームを南北軸に沿って配置した。そして、その周間に、間口一間の切妻屋根の2層、ヴォールト屋根の2層、少し地下に潜った扇型の平屋というように、3つのプロポーションの異なる小屋を境界側に寄せて建てて、それらに取り囲まれた場所を覆うように屋根を掛け、各住戸の居間とした。

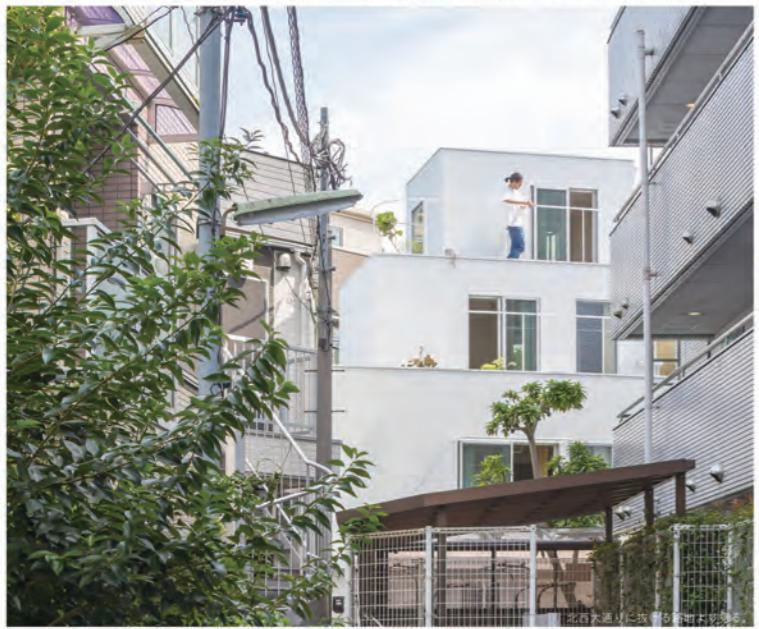
改めて近隣の建物を観察すると、非合理的なモノの取り合いや、ある種の共同幻想によって支えられているようなマテリアルの組み合わせがあり、世界は実際に曖昧だ。「相模原の家」では、この複雑な世界に歩調を合わせるように、周囲に見られる複数のシーンを断続的に再現したり、ありふれたマテリアルの肌理を誇張して表現しながら、室内外の仕上げの区分やディテール、モノの並べ方を調整している。そのようにして、やや過剰に抑えられたインテリアから隠む近隣の光景が、こちらに手織り寄せられたものとして、より具体的に把握されることを意図した。

室内から周囲の風景を見たとき、あるいは、駅からの道すがら目に触れる風景の中で、この家を媒介しながら、世界の成り立ちを想像し、見慣れた風景を対象化する。建築を介した世界のフレーミングによって、何気ない日常に主観的価値を見出すことによって、この世界を自分たちの手に取り戻すことができるだろう。





品川の家 内部の内部は外部である
東京都心の小さな変形敷地に計画された住宅。
階高は抑えられて（天井高さ2m以下の層が2層ある）、道路下、周辺建物2階上、周辺屋根の上、と4層に分節され、各層で固有の周辺環境と内部とが結びつくように開口部が設けられる。各層どうしの関係は吹抜け、階段、床レベルのいずれ、によって分断と連続が繰り返され、内部空間は部屋という単位ではなく、主に床・柱・梁・家具によって必要最小限の空間単位にゆるやかに分節される。2階の仕切りは外壁のように立ち上がり、最上階にはバルコニーの手摺のようなものが設けられ、内部の中にも内外の関係ともいえる内部をつくろうとした。
最小単位へと分節されていく空間と、それとは逆に、位相幾何学的に広がり繋がっていく空間がある。近い場所であっても遠くを感じる体験と、それに重ねて、同じ空間を見ても別の空間として感じる体験がある。
内部の中に外部としての存在が内包されることで、閉塞的な状況をつくることのない動的平衡としての空間を試みた。



住宅建築賞受賞者プロフィール

節会



渡邊 大志

WATANABE Taishi

1980年：神奈川県生まれ
2005年：早稲田大学理工学部建築学科専攻修了（石山修武研究室）
2005～2012年：石山修武研究室個人助手
2012年：東京大学大学院工学系研究科博士課程修了（伊藤毅研究室）
博士（工学）、一級建築士
2016年～：早稲田大学創造理工学部建築学科准教授
専門は、建築デザイン・都市史
2019～2020年：フィンランド・アアルト大学客員研究员
株式会社渡邊大志研究室一級建築士事務所主宰、
港区景観審議会委員、世田谷まちなか観光交流協会委員、
日本建築学会第22期代議員
主な作品に、「節会／倉庫と舞台」、「レッドハウス」、「空気のグロッタ」など
主著に、「東京臨海論－海からみた都市構造史－」（単著、東京大学出版会、2017）、
「図説 港区の歴史」（共著、港区、2020）、
「みる・よむ・あるく東京の歴史5」（共著、吉川弘文館、2018）など

相模原の家



青木 弘司

AOKI Koji

1976年：北海道生まれ
2001年：北海学園大学工学部建築学科卒業
2003年：室蘭工業大学大学院建設システム工学専攻修士課程修了
2003～2011年：藤本壯介建築設計事務所勤務
2011年：青木弘司建築設計事務所設立
2012年～：武蔵野美術大学非常勤講師
2013年～：東京造形大学非常勤講師
2014～2015年：東京理科大学非常勤講師
2015～2017年：東京大学非常勤講師
2017年～：前橋工科大学非常勤講師
2018年：合同会社AAOAA一級建築士事務所共同設立
2020年～：早稲田大学、文化学園大学、東京都市大学非常勤講師
2021年～：法政大学兼任講師

岡澤 創太

OKAZAWA Sota

1984年：千葉県生まれ
2006年：武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業
2006～2010年：ミサワホーム株式会社勤務
2015年：岡澤創太一級建築士事務所設立
2018年：合同会社AAOAA一級建築士事務所共同設立

角川 雄太

TSUNOKAWA Yuta

1984年：北海道生まれ
2006年：北海道中央工学院（現ADI札幌建築デザイン専門学校）卒業
2009年：室蘭工業大学工学部建設システム工学科卒業
2009～2011年：室蘭工業大学大学院研究生
2012～2020年：青木弘司建築設計事務所／
合同会社AAOAA一級建築士事務所勤務
2021年：角川雄太建築設計事務所設立

高橋 優太

TAKAHASHI Yuta

1986年：新潟県生まれ
2010年：武蔵工業大学工学部建築学科卒業
2012年：東京都市大学大学院工学研究科建築学専攻修了
2012～2013年：The Oslo school of Architecture and Design留学
2013～2017年：株式会社日建設計勤務
2018年～：合同会社AAOAA一級建築士事務所勤務

はつせ三田



井原 正揮

(写真:左)

IHARA Masaki

井原 佳代

(写真:右)

IHARA Kayo

1980年：福岡県生まれ

2002年：名古屋大学工学部社会環境工学科卒業

2003～2006年：東京工業大学大学院理工学研究科建築学コース中退

2007～2014年：株式会社シーラカンスアンドアソシエイツ勤務

2015年：ihrmk主宰

2016年：株式会社ihrmk設立

2016年：名古屋大学非常勤講師

2020年～：駒沢女子大学非常勤講師

1979年：東京都生まれ

2002年：神奈川大学工学部建築学科卒業

2003年：キングストン大学大学院美術・デザイン・建築学コース修了

2009～2016年：シーラカンスアンドアソシエイツ(プレス)

2016年～：株式会社ihrmk

2017年～：神奈川大学非常勤講師

森の図書館



三井 嶺

IMITSU Rei

1983年：愛知県生まれ

2006年：東京大学工学部建築学科卒業

2008年：東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程(日本建築史)修了

2008～2015年：坂茂建築設計勤務

2015年：三井嶺建築設計事務所設立

品川の家



大石 雅之

OISHI Masayuki

1979年：広島県生まれ

2003年：東京都立大学工学部建築学科卒業

2005年：東京都立大学大学院修士課程修了

2005～2011年：青木淳建築計画事務所勤務

2012年：大石雅之建築設計事務所設立

2018～2020年：日本大学理工学部非常勤講師

2020年～：多摩美術大学芸術学科非常勤講師